
マルとウキさん

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マルとウキさん

【Zマーク】

N1877

【作者名】

じほんライス

【あらすじ】

ダウンタウンのコント「おかんとマー君」みたいな書こうとしたらこんなもんできました。河野夜兎先生の知り合いであるところのハルくんとアキさんとは何の関係もございません。マジで！…！

作者談・昔、ダウンタウンがやっていた「おかん」という連作コントを思い出しながら書いてみました。。。

一
マル
一
いけ
一
一
一
一

「———」

タツチがアラウスのところへすんでいたが、墨に潰り込んだが、アラウスになってしまった。

バンバン叩く。

「やめひ。ばばあ。ひのせひ。痛い」

「ヤミル、ヤミル、ヤミル」

試合はそれで終わり。

ウキさんは、場内に飛び込んで、審判

た。

あ
ま
う!
一

「ぬれやん。やめしよひ。お願ひ。やめしよひ」

「お母さん、落ち着いて落ち着いて」

ウキさんは審判を順番に殴り始めた。

「ベンチから選手もわらわら集まってきた。

「うるせえ。ガキ。えい」

「いてえ！」

つこには、審判員も交える大乱闘。

「中学の試合で乱闘で初めて見た。。。」

ウキといっしょに試合を見に来ていた、同じ会社の「つかえは」、ちよつとおかしくて「ふふふ」と笑つてる。

「つかえは。全員、しばいたる————！」

結局、ウキさんのせいでもルのチームは、一ヶ月試合出場の刑に処せられた。

「ははははは。まあまあ。野球だけが人生じゃないさ」

「ひつぐ。ひつぐ。母ちゃんのせいだよ。母ちゃんのばか」
つかえは運転しながら、ウキをたしなめる。

「そうだよ。ウキさん。ひどいよ。マルがかわいいだよ」

「なによ。うそつべまでえ」

ウキさんは口を膠らます。

つかえは、またふふと笑う。この「ひどい」というのがウキさんの魅力だ。

まあ何はともあれ、その晩、ウキさんが罪ほひほじに特製ステキを振舞つたのでマルも「ハーフ」納得した。独身のつかえもウキさんのところに「うち」になつた。

そんな豪快なウキではあつたが、ある日の会社の更衣室にて。

「つか。どないしよ？」

「どうしたの。ウキさん。暗い顔しちゃって」

「つもは、「つかっぺ。ターシチ」とつかえのおっぱこを触つてくるのに今日はしない」。

「つかっぺ。聞いてくれよ」

「う、うん」

ウキは、実際にウキらしくない口調でしゃべり始めた。

「わたしの弟が日本に帰つてくるらしいんですね。わたし、どないしよう。ほんま、どないしよう。わたいどないしたらええかさつぱ

りわかりまへん」

ウキさんによると、ウキさんの弟はウキさんよりさうに乱暴者で、一時期、やくざの幹部をしていたのだが、抗争に巻き込まれ、国外に逃げていた。音信はなかつたが、一説ではマフィアになつてるとか。充分ありひむことだとウキさんは言ひ。

「大丈夫よ。ウキさん。実の姉にひどいことはしないでしょ」

「うわっぺは、『リ夫の怖さを知らないからそんなことが言えるんだ。うちのお母さんかて、昔、『リ夫にマジサーディされて骨折したんやで』

ともかく、いつものように、ウキ、うわえ、マルで食事をとつていた。ウキの旦那さんは残業だ。

ぴんぽーーーん。

「ま、まさか

ドアが開く。

「ういい。ねえちゃん。久しづり。ひつく

「『リ夫！あんた飲んでるね！』

『リ夫は』一メートルくらいある。顔も『コラみたい。服を着たゴリラ』という感じ。

「ほえ〜」でけえ

「お。お前がマルか。ひつく。大きくなつたな。何年生や。ひつ
くひやつく」

「ちゅ、中学三年生です」

「おお。いい体だ。鍛えとるな。何かスポーツやつとるのか。ひつ
く

「や、野球をします」

「どうれ。筋肉ちょっと見せてみい。ひつく

『リ夫がマルの腕を握つた。

ぼきぼきぼき。

「いてええええええええええええええ

マルは床に転がつた。完全に骨折れた。

「あ。すまん。ひくひっく」

「こら。ゴリ夫。うちの息子になにすんねやー。」

「すまん。すまん。おっと。このねえちゃんは。ひゅっく」

「わたいが勤めてる会社の同僚のうえちやんだよ

「ど、どつも」

「わははははは。色っぽいねえちやんだなあ。ちょっとおつちやんの触つてよ」

「ゴリ夫がズボンを脱ごうとする。

「あつ何ちゅうことを。このくや、ゴリコラ」

ウキさんがゴリ夫に飛び掛つたら、ゴリ夫はあつといつ間にウキさんを投げ飛ばした。

「どしゃーーーーーーーん。

テーブルに激突して、テーブルの上の料理がぐつしゃぐしゃ。

「あわわわわ。ウキさん大丈夫?」

「わ、わたいは大丈夫」

額から血を流してるよー全然、大丈夫じやない!

「そ、それより、うわつペ。マルは大丈夫か」

「あつ」

マルが金属バットを持って、ゴリ夫に立ち向かつてゐる。

「か、母ちゃんのカタキ」

「ふん。おもうい。ひっく。来な」

マルがえええいやああああと突進し、ゴリ夫の肩に金属バットを思い切り振り落とした。

「ありやりやりや？？？？」

金属バットがぐにやりと曲がった。

「うそーん」

「がつははははは。甘いな。マル。ひっく。今度はこっちの番だ」

ゴリ夫は酔いのせいかふらふらしながら、マルを持ち上げた。

「うわああ。怖いいいい。母ちゃんーーーん」

んで、投げた。

がしゃ――――――ん。

ガラス窓を突き破り、落下した。「うわあああああああ」四階
なのでたぶん、骨折する。

「ぐふふふふふ

うさえは絶対絶命である。ウキさんに助けを求めようにもすでに
気絶してゐる。

「おねえちゃん。ひっく。いい体してゐやんけ。皿やつやんけ。ひ
っく。ひっく」

うさえは怖くて尻餅をつき、がたがた震える。パンツ丸見え。そ
れがまたゴリ夫を刺激する。

「うやつほ――――――!セクシ――――――!」

うさえに飛び掛るゴリ夫。

「――から先は少年誌では描[跡]できません。口なしごりこの読者諸
君。じめんなつせ―――。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1877/>

マルとウキさん

2010年10月8日14時40分発行